

夏の参加型ワークショップ実施報告

夏季休業中、定員 100 名のところ、全国から小・中・高の先生方、約 140 名の参加があった。今回は、附属小・中・高のタテのつながりの見えるワークショップを初めて開催した。児童・生徒に英語でどのような「やり取り」ができるようになってほしいか。そうした「やり取り」ができるようになるには、日常的にどのような活動や指導の工夫、雰囲気づくりなどが必要なのか。筑波大学附属小・中・高での授業実践をご覧いただいたうえで、ワークショップを通して考えを共有した。



テーマ：「やり取り」を感じよう ～活発な「やり取り」を生むための仕掛けを考える～

実施日 令和 6 年 8 月 8 日（木）

場 所 桐陰会館

時 程

受付	開会	高 校 実践紹介 ・ワークショップ	休憩	中学校 実践紹介 ・ワークショップ	小学校 実践紹介 ・ワークショップ	質疑応答・ ディスカッション	講評 小泉利恵先生 （筑波大学）	閉会
13:00	13:30		14:10	14:20	15:10	16:00	16:20	16:30

* 講評：

1. 高 校：実践報告

授業者：桑原香苗・曾根典夫（英コミⅠ）、矢田理世（論理・表現Ⅰ）、物井真一（英コミⅡ）

授業ビデオを使い、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」、「論理・表現Ⅰ」の授業内での生徒とのやり取りの様子を報告した。「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」では、授業冒頭で、導入の際の教師と生徒との英語での「やり取り」や、題材に関連するトピックをクイズ形式にする生徒同士のペアワークをさせた。「論理・表現Ⅰ」では、生徒のスピーチとそれに対する質疑応答を「生徒同士のやり取り」とした。活発な「やり取り」に向けて、日頃から生徒との良好な関係を保ち、生徒が答えやすい発問を用意し、生徒の声をできるだけひろい全体に共有するための工夫を紹介した。



2. 中学校：実践紹介・新出事項の導入（文法）

授業者：植野伸子、栖原昂、高杉達也、中島真紀子

中学校では、新出文法の口頭導入時のやり取りと、音読後の活動におけるやり取りという二つの実践について紹介した。新出文法の導入は、教師からの一方的な説明になりがちである。しかし、導入の場面をよりインタラクティブにすることを意識することで、生徒とのやり取りの機会を生み出すことができる。音読後の活動では、対話型リテリングの取り組みを紹介した。一方的な再話ではなく、聞き手が質問や反応を行えるような流れを手順に取り入れた。特別に「やり取り」の活動を設定するのではなく、日常的な活動をいかに相手を意識した「やり取り」の場面に変えられるかを提案した。



3. 小学校：実践紹介・ワークショップ

授業者：黒木愛

最初に「目の前子どもたちにどんなやり取りができるようになってほしいか」についてグループで伝え合ったり、オンラインボード「ふきだしくん」で思いを出し合ったりした。実践紹介では、附属小学校の帯活動の具体を話し、パフォーマンステストで子どもたちが進んで伝え合う動画を観ていただいた。「場数を大切に、間違えながら何度もやってみる経験をする事」など、大切にしていることについて共有することができた。校種を超えて「小学校段階における活発なやり取りを生む仕掛け」について意見交換し、授業のヒントをいただくことができた。

